

教員フェローシップ体験例 ～申込から参加・報告まで～

2004年花王教員フェローシップの、「大西洋北西部のサケ」の調査に参加された先生の体験例です。是非参考にしてください。
なお、教員フェローシップの報告書はアースウォッチのホームページ (<http://www.earthwatch.jp>) に多数掲載されています。

2月 アースウォッチとの出会い

何気なく眺めていた勤務先の掲示板にアースウォッチの文字を目にしたのは2月の終わりでした。環境教育に関わり、自然と子供をつなぐプログラムに興味があった私は、一にも二にもなく、派遣ボランティアとして海外で本格的なフィールドワークが体験できるという内容に、飛びつきました。

3月 参加プロジェクトを選ぶ

今回募集のあったプロジェクトは5つで、ヨーロッパから東南アジア、北米が対象地で、それぞれ2名の派遣でした。興味があったのはスリランカのサル群団と、大西洋北西部のサケでしたが、今回は日程の都合で北米のサケに応募しました。北米はカナダや東のグレートスモキーマウンテン国立公園、内陸のイエローストーン国立公園と自然保護の最先端の地を訪れる機会はありませんでしたが、一度人間が手を加えた自然の回復というこのプロジェクトの内容に興味を覚えました。

5月～6月 準備期間

選考結果の通知を受けて、大喜びしたのも束の間、次々に提出期限が迫る書類への対応、飛行機・ホテル・バスの予約、特殊な装備の準備と、5月の連休明けから始めた準備は、まとまった時間が作れず遅々として進まず、ブリーフィング(プロジェクト解説書)も読み込む時間がないまま不安ばかりの3ヶ月間でした。

7月31日 ランデブー(集合)

成田から8時間、東海岸に比べれば4時間も早いシアトル国際空港までのフライトはあっという間でした。ブリーフィングを電子辞書片手に読みこなそうとか、英会話の本でも読もうなどと考えていた目論みははずれ、ばたばたしながらランデブーポイントのコットンツリーイン(ここは予約がいっぱいで宿泊できません)へ。日本からのもう一人の参加者・秋田先生や、数人のメンバーと合流でき一安心。もろもろの不安も吹っ飛びました。

チームメンバー

今回のプロジェクトは、主任研究員の Dr. Ralph Riley と研究生の Karl、そして私たちボランティア8人のチームで調査を行いました。アメリカ、イラン、日本3カ国の混成教師チームは博士やスタッフのリーダーシップに導かれ、誰からとなく仕事を分担し、また協力し、この短い期間を家族のように過ごすことができました。1週間の今回の調査活動や共同生活において、このような自主的な行動がチームの作業を円滑にし、皆が心地よいと感じる環境をつくり出すことができましたと感じます。言葉の壁を越えるため、身をもってチームメンバーのあるべき態度を示してくれた博士やスタッフに感謝の気持ちでいっぱいです。



チームメイトと一緒に

8月1日 調査開始

集合日の翌日から作業が始まりました。原生林に囲まれた North Fork Sauk River (上流域) にて調査方法を実際に見ながら説明を受けます。勿論、レクチャーは英語で行われ、何を、どのようにするのか、理解できず、皆の様子をじっと観察するばかり。すると、スタッフの一人が皆に模範を示すつもりで川に入りはじめたのですが、手本になるべき彼は、川幅に満たないメジャーで計測を行おうと悪戦苦闘。その姿に一挙に緊張が解けたものでした。

最初の作業は、メンバー全員で30分以上かかったのですが、徐々にコツをつかみ、2つ3つとグループに別れ作業を行えるようになり、手際も良くなりました。皆の会話が理解できない私は、最初は勿論役立たずでしたが、Dr. Riley の具体的な指示でなんとなく体が動き始め、初日の後半には、調査活動に参加できているという実感を得ることができました。

8月1日～2日 上流域の調査

太平洋に注ぐ大河・スカジット川の支流 North Fork Sauk River (上流域) では、川をきれいにするために、流木や倒木を全て排除していた時代があったようです。しかし、最近の研究でそれがかえってサケの産卵場所を無くし、サケの減少を促したことがわかってきました。今回の調査は、主に流木や倒木の記録と、川の両側の森の植生調査が中心となりました。上流域の森には、自己再生の力がしっかり働いていましたし、朽ちた木からは次の世代の幼木が育ち、落ち葉も窒素を定着させるという重要な役割を担っていました。森に点在する、ひこばえの幼木は、再生回復を象徴する光景に思われ、私は何枚もの写真を撮ってしまいました。



距離・方位・傾斜度を測り、記録する

8月3日～8月5日 下流域の調査

下流の調査地域は、現地のNPOが川を復元するために買い上げた土地で、100年ほど前までは牧草地として使われていた場所でした。開拓当時に、まっすぐに整えられた川の流れを、再生回復に欠かせない蛇行した原始の姿に戻す努力がなされています。(人為的ではなく、洪水などの力を利用して、時間をかけて見守る努力です)土木工事を主とした川の変形、ショートカット、三面張りなど自然をコントロールしようという日本の現状とは相反する作業が行われていることに驚きました。人間が唯一手を加えているのは、洪水で流れついた流木をアンカーでその場に留め置くという作業で、まるで再生象徴のオブジェのように思われました。ここでの作業は、川の地形を調査と、その土地に植えられた植物の調査でした。



アンカーでとめられている流木 この流木もこの形でとめられている

9月 報告書の作成・クラスで報告

帰国後、「あー、楽しかった！いい経験をした！リフレッシュできた！」と、喜んでばかりはいられませんでした。すぐに、報告書作成という大きな宿題がありました。学校が始まる直前に、なんとか完成・提出しました。

現在担任している1年生の子どもたちには、原生林の森の中で、必死に拾ったコメツガの実(小さな松ぼっくり)を1人につずつ、お土産としてあげました。それを渡しながらか、何をしてきたか、森の中はどんな様子だったか、話しました。また、1年生から3年生の、礼拝の話の中で、森の再生力について、「神様の作られた自然には、無駄なところがない」というテーマで話をしました。

10月 花王本社での報告会

デジタルカメラで撮ってきた膨大な写真を整理して、パワーポイントにまとめ、なんとか報告会の日を迎えることができました。一緒にプロジェクトに参加した秋田先生以外は、皆さん初めて会う方々ばかりでしたが、まるで事前に打ち合わせをしたかのように、内容が揃っていました。そして、どのプロジェクトも興味深く、時間を忘れ聞き入ってしまうものばかりでした。

11月 日本環境フォーラム・清里ミーティングにて、体験報告

せつかくのすばらしい体験を、私にとって環境教育との出会いの場であった、環境教育フォーラムで報告しようと考えました。一緒にプロジェクトに参加した秋田先生、アースウォッチジャパンの鈴木さんに声をかけ、3人でアースウォッチのこと、今回のプロジェクトのことを発表しました。環境教育の分野で働く多くの方々に、聞いていただくことができました。ア

スウォッチというNPO法人のこと、花王のフェロシップのことを、たくさんの人たちに知ってもらえる機会になったのではないかと思います。

1月 学校の紀要への執筆

今回のプロジェクト参加に当たっては、全額ではありませんが、私が勤務する学校からも援助をいただきました。その条件として、学校の紀要へ体験報告書を書き載せるというものでした。この執筆が、冬休みの作業となりました。これが終わって、ほぼ1年に渡った、このプロジェクトに関わる“宿題”が終わりました。

プロジェクトをふりかえって

『自然のすばらしさを感じ、好きになり、大切にしようと思う。』このつながりを体験することが、環境教育の第一歩だと、私はいつも考えています。子どもたちが、自然に目を向け、アンテナを張ろうと思うきっかけは、教師の言葉かけひとつ。これは、今までの経験から私が感じていることです。私がアースウォッチのプロジェクトに参加したのは、その言葉かけの幅をぐっと広げること、目的の一つでした。

日本の夏の教員研修会は、2学期の授業にすぐに生かせる具体的な内容のものがほとんどです。このアースウォッチのプロジェクトは、環境教育の本質を知ることができることと、グループワークにより教師自身が成長できることが魅力です。

原生林の森の中へ身を置き、自然に抱かれて心が癒され、温かいメンバーに囲まれ人間として磨かれたような気がします。今すぐに、どんなふうにもこの経験を生かせるかわかりませんが、私の人生にプラスになったことは確かです。この7日間の感動を忘れないで、機会を逃さず、体験を生かしていきたいと思っています。



原生林の森の中で、ブレイクタイム



薬：ひこばえ(木の切り株などから出てくる小さな芽)